様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　６月　８日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2008
課題番号：１９５００５４７
研究課題名（和文）後天的身体障害者のアスリートキャリア形成に関する社会学的研究

研究課題名（英文）Sociological Study of Athlete Career Development of Persons of Acquired Disabilities

研究代表者：吉田　毅
東北工業大学・ライフデザイン学部・准教授
研究者番号：７０２１０６９８

研究成果の概要：
車椅子バスケット日本代表クラスの後天的身体障害者を対象に、彼ら／彼女らのアスリートキャリア形成に関して検討した。このプロセスでの性差として、主に車椅子バスケットに参加する契機の相違が認められた。男子は他律的な面が顕著であるのに対し、女子は自律的な面が顕著であった。その後の車椅子バスケットに定期的、継続的に参加するようになる要因としては、良き仲間を得たことや車椅子バスケットそれ自体の魅力が、参加し続ける要因としては、向上心とともに、身近にアスリートとしての同志や役割モデルを得たことが認められた。こうした一連のアスリートキャリア形成をめぐる主な問題点として、競技活動と仕事や家庭との両立、また練習場所や資金といった物的な側面が認められた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
19 年度	700,000	210,000	910,000
20 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学
キーワード：スポーツ社会学

１．研究開始当初の背景
身体障害者の自立や社会参加等を促進するためにも障害者スポーツ振興は重要であり、身体障害者のスポーツへの社会化（スポーツに定期的、継続的に参加するようになる過程）の要因等について検討することにより、障害者スポーツ振興のための手がかりが得られると考えられる。しかし、この研究領域では身体障害者を対象とすることは少なく、特に後天的身体障害者（以下「後天的身障者」）を対象とすることは重要な課題として残されていた。そこで、筆者は近年、障害者スポーツの代表的種目である車椅子バスケット（車椅子バスケットボール）男子日本代表クラスの後天的身障者における車椅子バスケットへの社会化に関する調査を進めて

きた。本研究はそれを発展させることを意図するものである。本研究の特色・独創性は主に次のようである。

⑴研究対象としての後天的身障者
　スポーツへの社会化の側面では、この研究領域で重要な課題として残されていた後天的身障者を対象とする。また、検討の射程を、スポーツへの社会化を遂げた後に拡大する。スポーツに参加し続ける過程でも身体障害者においては健常者と異なる要因や問題点があると考えるからである。そうした一連のアスリートキャリア（競技者としての経歴）形成過程に関しては身体障害者を対象とした研究それ自体が皆無である。

⑵研究対象の捉え方―競技者としての身体障害者・競技スポーツとしての障害者スポーツ―
　今日は競技力向上を目的としてスポーツに打ち込む身体障害者は少なくないにも拘わらず、障害者スポーツに関する研究では身体障害者を競技者と捉え、そのキャリア形成を問題とした研究は見られない。

⑶研究の方法論―スポーツを実践する身体障害者の実相および主観性を捉える―
　従来の障害者スポーツに関する研究は、その振興政策やスポーツ施設のバリアフリーをめぐる問題、また障害者スポーツの検討によってみえてくるスポーツ一般の問題に着目するものが主であり、スポーツを実践する障害者の姿や経験を遠景化してしまっていた。本研究は、スポーツを実践する身体障害者に直接にアプローチし、その実相を浮き彫りにしようとするものである。また、スポーツへの社会化に関する研究では、個人の主観的側面（内面）を捉えることが重要な課題とされているが、本研究は個人史法を用いることで、正しくそうした課題に応えようとするものである。

　以上のように、本研究は各研究領域で重要視されながら検討には移されてこなかった側面に着目するから、学術的に意義深い新たな知見が得られることが予想される。また、そうした知見は、実践的にも有意義なものとなるだろう。つまり、障害者スポーツの振興はもとより競技力向上のための手がかりとなり得るだろうし、身体障害者となったことによる困難を乗り越えてアスリートキャリアを形成し続ける過程に着目するという点では、多くの身体障害者はもとより健常者にも困難克服の手がかりないしエネルギーの源泉を提供し得るような知見が得られるものと思われる。さらに、身体的に制限を有する者が、なぜ身体性を核とするスポーツに参加しようとするのか（参加し続けるのか）を検討することで、人間にとってのスポーツの根源的な意味の解明にも寄与し得る知見が得られるのではないかと考える。

２．研究の目的
　後天的身障者のアスリートキャリア形成過程、つまり後天的に身体に障害を負った者が競技路線の障害者スポーツに定期的、継続的に参加するようになる過程（スポーツへの社会化過程）、ならびに参加し続ける過程に着目し、それをめぐる要因と問題点、さらに後天的身障者にとってのスポーツの意味について検討することが本研究の目的である。具体的には次の３点について検討するが、それにあたり、車椅子バスケットにおいて比較的高い競技レベルにある競技者を調査対象とする。

⑴日本代表クラス競技者の車椅子バスケットへの社会化をめぐる性差：女子日本代表クラスの後天的身障者の車椅子バスケットへの社会化過程について調査し、筆者が有する男子日本代表クラスのデータとの比較によって性差について検討する。

⑵わが国のトップレベルのクラブメンバーの車椅子バスケットに参加し続ける要因と問題点：上記１の⑴で述べたように、検討の射程を車椅子バスケットに参加し続ける過程に拡大し、わが国でトップレベルにある複数のクラブにおける後天的身障者の車椅子バスケットに参加し続ける要因と問題点を検討する。

⑶後天的身障者のアスリートキャリア形成をめぐる要因と問題点、および後天的身障者にとってのスポーツの意味：上記⑴と⑵に関して得られた知見等を基に、後天的身障者のアスリートキャリア形成をめぐる要因と問題点、さらに後天的身障者にとってのスポーツの意味について総合的に考察する。

３．研究の方法
＜平成 19 年度＞
⑴「研究目的⑴」に関して、５名の女子日本代表クラス競技者にインタビューを行い、各々の個人史を構成する。それにより、日本代表クラス競技者における車椅子バスケットへの社会化の要因や問題点をめぐる性差について検討する。
⑵「研究目的⑵」に関して、仙台市を拠点とする車椅子バスケットクラブ「宮城ＭＡＸ」の活動を観察・撮影しつつ、メンバーの後天的身障者にインタビューを行い、参加し続け

る要因およびその上での問題点を検討する。

＜平成 20 年度＞
⑴「研究目的⑵」に関して、東京都を拠点とする車椅子バスケットクラブ「ＮＯ　ＥＸＣＵＳＥ」の活動を観察・撮影しつつ、メンバーの後天的身障者にインタビューを行い、参加し続ける要因およびその上での問題点を検討する。
⑵「研究目的⑶」に関して、後天的身障者のアスリートキャリア形成をめぐる要因と問題点、および後天的身障者にとってのスポーツの意味について、研究目的⑴と⑵に関する検討で得られた知見等を基に総合的に考察する。

４．研究成果
事例の障害による困難克服プロセスの詳細をここで呈示する余裕はないが、本研究では、各々が障害を負ったことで「どん底」を経験し、過酷な状況を乗り越えて車椅子バスケットに打ち込み続けるに至る実相に迫ることができた。そうした姿は、我々にとって困難克服の手がかりないしエネルギーの源泉となり得るように思われる。次に、本研究の成果について述べよう。

⑴「研究目的⑴」について
女子日本代表クラス５名の個人史を構成するために、各々に対し、生い立ちから障害を負った状況、その後に車椅子バスケットへの社会化を遂げるまでの様相について時系列的に聞いていく半構造化インタビューを２回ないし３回に分けて行った。
彼女らは、骨肉種、交通事故、階段での転落、スノーボード事故、それに医療ミス（足首の怪我）により下肢に障害を負った者たちである。障害を負って暫くの間は皆、容易に立ち直ることはできなかった。そこからリハビリによって日常生活を送れるようになり、各々なりに一定期間を経てから車椅子バスケット（リハビリとは異なる競技路線の）と出会った。ここでは事例の代表として、骨肉種を患ったＫさんの車椅子バスケットに参加するに至るまでの略歴を示したい（「　」には語りをそのまま記す）。
Ｋさんは幼少期から活発で、よく近所の男子と外で運動遊びをした。小学時代から水泳や陸上等のスポーツに取り組んだ。身長が高く集団種目が好きだったこともあり、中学ではバレーボール部に入って部活に打ち込む日々を送った。３年生になり、最後の大会に向けて練習に励んでいた６月のある日、１年ほど前から違和感のあった足が急変、「おもりのように」なり「立っていられない状態」となった。間もなく嘔吐や激痛、病名は「脊髄腫瘍」であった。手術は成功したが車椅子生活を余儀なくされた。告知の際には「ショックというよりも信じられない、理解できない感じ」だった。その後、リハビリに取り組み復学することができたが、「皆に車椅子姿をみられるのが嫌だった」。学校側はトイレ等のバリアフリー化を進めてくれていた。クラスメイトも支援してくれた。卒業後は、養護学校を嫌い通信制の高校に進んだ。「障害者に対する世の偏見を感じ」、学校に行く以外は「引きこもり状態」となった。18 歳になると、念願であった自動車免許を取得した。その後は一気に行動範囲が広がった。「何か始めたい」「できればスポーツを」と思い、以前入院していたリハビリセンターのスタッフに相談したら、ある車椅子バスケットクラブを紹介された。練習を見に行き、間もなく参加した。「シュートもリングに届かないし、思うように動けなかったけど無性に楽しかった」。そこは男子クラブであったが「皆やさしく自然に入れた」と言う。ただ、Ｋさんがプレーするにはレベルが高く、やがてそこのメンバーから近隣で活動する女子クラブを紹介された。「馬鹿をやる人も多くて楽しかった」。レベル的にも丁度よく、やがて公式戦にも出場することができた。練習は週３回。仲間にも恵まれ、車椅子バスケットに打ち込むようになった。卒業後へ向けて職業訓練にも取り組み、充実した日々を送るに至った。
Ｋさんについては概ね以上のようであるが、車椅子バスケットへの社会化をめぐる性差としては、主に車椅子バスケットに参加する契機（車椅子バスケットとの出会いの状況）の相違が認められた。男子においては、車椅子バスケット界の他者の誘いによって他律的に車椅子バスケットに出会った者が顕著であるのに対し、Ｋさんの略歴にもみられるように、女子のほとんど（4 名）においては他律的にではなく、自律的に（自らの意志で）車椅子バスケットを見に行ったことや、何らかのスポーツに取り組もうとするにあたり車椅子バスケットに出会ったことが参加の契機となったのである（1 名のみ、男子のほとんどと同様、入院中に車椅子バスケット界の他者から誘われた）。
また、その後の車椅子バスケットに定期的、継続的に参加するようになる過程には顕著な性差が認められなかった。男女とも良き仲間を得たことや、車椅子バスケットの楽しさややりがいを覚えたことなどにより車椅子バスケットへの社会化を遂げたとみられる。なお、女子の中にはその途において、彼氏の反対によって車椅子バスケット活動を中止せざるを得なかった者が１名、彼氏の存在が車椅子バスケット活動を後押ししたとみられる者が１名いた。交際中の異性に左右され

る側面は男子では認められなかったため、女子に特有なのではないかと思われる。

こうした中で、特に車椅子バスケットに参加する契機に関する知見は、車椅子バスケットに限らず障害者スポーツの普及度の性差、つまり女子よりも男子における普及度が高いことを物語るものでもあろう。男子では車椅子バスケット界の言わば勧誘ネットワークが一定レベルで形成されているのに対し、女子においてはそこまで至ってはいないとみられる。それゆえに、女子の場合は自律的に車椅子バスケットに出会ったという者が顕著なのであろう。

⑵「研究目的⑵・⑶」について

仙台市を拠点とし、定まった練習場所を有する「宮城ＭＡＸ」（以下「ＭＡＸ」）と、東京都を拠点とし、定まった練習場所を有していない「ＮＯ　ＥＸＣＵＳＥ」（以下「ＮＯ」）を対象に調査を行った（クラブ活動の撮影は予算の関係で写真となった）。両者ともわが国屈指の強豪クラブであるが、もとより上記のようにタイプが異なるゆえに調査対象に選定した。なお、ＭＡＸの調査は女子選手の調査と同年度に進めたこともあり、ＮＯの調査の方が時間的余裕をもって集中的に行うことができた。そのため、データはＮＯに関する方が比較的多く収集することができた。ＭＡＸでは後天的身障者８名中４名、ＮＯでは後天的身障者 12 名中６名（コーチ兼任１名含む）がインタビューに応じてくれた。各々に対し、生い立ちから障害を負った状況、その後に車椅子バスケットに参加し続けるに至る様相を時系列的に聞いていく半構造化インタビューを行った。また、各クラブのスタッフに対し、クラブ活動の問題点等についてインタビューを行った。ＭＡＸは全メンバーが仙台市圏内に住んでおり、平日の練習でも揃いやすいのに対し、ＮＯの場合は調査対象の６名だけでも、居住地は都内が１名、千葉県が２名、埼玉県が１名、それに福島県が２名であり、平日の練習はメンバーがあまり揃い難い状況にある。福島県在住の２名は、基本的に週末のみ練習に参加しているとのことであった。

まず、後天的身障者のアスリートキャリア形成の要因についてであるが、対象者の車椅子バスケットとの出会いは、ＮＯの１名（小学生時代に骨肉種を患った者）のみ車椅子バスケットの体験会を通じてであり、その他は他者（車椅子バスケット関係者等）の誘いによってであった。やはり前述した女子とは好対照であった。彼らは、車椅子バスケットを初めて見た際には「面白そう」「すごい」と思ったり、バスケット経験者（ＭＡＸ２名、ＮＯ１名）の場合は「これもバスケットだ」「またバスケットができるんだ」と感動するなどして車椅子バスケットを初めて体験した。その後、実際に「面白さ」や「楽しさ」に惹かれ、「仲間」にも恵まれて定期的、継続的に参加するようになった。彼らの車椅子バスケットへの社会化過程は、基本的にこのように捉えることができる。そんな中、ＮＯのコーチ兼任１名は「かけなくなっていた運動による汗をかけたことが快感だった」「社会で感じるバリアがなかった」というユニークな要因を挙げた。こうした点は、後天的身障者にとってのスポーツの意味を考える上で示唆的と思われる。この１名を除き、社会化の要因に関してはクラブ間の差違がほとんど認められなかったが、その後の参加し続ける要因には各クラブの特徴が現れたように思われる。ＭＡＸのメンバーは概ね、上記のような単なる仲間ではなく、ともに競技を志すアスリートとしての「同志」と言うべき仲間を得たこと、そうした中で湧いてきた「うまくなりたい」「仲間に負けたくない」という「向上心」が要因となって参加し続けてきたとみられる。それに対し、ＮＯのメンバーの場合は「向上心」はもとより、４名はそのベースとして「目標」ないし「あこがれ」の対象をクラブで得、そうしたアスリートとしての役割モデルとなり得る他者がクラブにいることが競技活動を続けてきた要因とみられる。ＭＡＸはある選手の下に結集したクラブというわけではないのに対し、ＮＯは数名のリーダー格の選手の下に結集したクラブであり、そうしたことがメンバーの車椅子バスケットに参加し続ける要因にも現れたものと思われる。

次に、問題点についてだが、これには両クラブに共通のものと、そうではないものとがみられた。

ＭＡＸの１名は「会社で車椅子バスケット活動を遊びにしかみてもらえなかった」、また「仕事が忙しくて練習に出られなくなった」ということで会社を辞め、インタビュー時は「車椅子バスケットを理解してくれる職場」を探している状況であった。他１名も「前の職場では仕事が忙しくなり、徐々に練習に参加できなくなった」ため辞職した。その後に公務員試験に合格し、新たな職に就いてからは車椅子バスケット活動も軌道に乗ったのだが、やがて再び「多忙になって練習に出られなくなった」。この１名は、問題点として「家庭との両立」も挙げた。共働きの「女房と休みが重ならず、すれ違うように」なり、離婚する羽目に陥った。「今は問題ない」という者も１名いたが、この選手は「他のメンバーをみると仕事との両立が大変そう」と答えた。ＭＡＸのヘッドコーチの話によれば、これまで同クラブの指導を続けてきた中で、やはり「仕事の問題」と「結婚している者は家庭の問題」があるとのことであった。氏は、

加えて「お金の問題」にも触れたが、ＭＡＸは 19 年度よりスポンサーを獲得し、一定額の補助を受けられるようになった。そのため、以前よりは多少とも楽になったということであった。

一方、ＮＯの場合は、問題点として仕事や家庭との両立を挙げる者は２名であった。この点はＭＡＸと共通するが、平日にも練習に参加し得る首都圏在住の４名は「練習場所が不安定」「練習でメンバーが揃わない」という点を挙げた。ＮＯは前述のように、メンバーの居住地が広範に亘るばかりか、定まった練習場所を有していない。練習場所を確保することが難しく、都内各所、千葉県、茨城県と、いわゆるジプシー生活を余儀なくされている。スタッフの話によれば、このクラブは、ある障害者施設（障害者スポーツセンターのような）で発生したクラブではなく、都内の一地域スポーツクラブに過ぎない。地域スポーツクラブがおびただしい数に及ぶ首都圏、しかもＮＯが使用するにはバリアフリーが施されている施設が求められるため、なかなか練習場所を確保することが難しいとのことであった。それに対しＭＡＸは、設立時より県の障害者施設を活動拠点としており、通常はそこで週に２、３日練習を行うことができる。こうした点が、ＭＡＸとＮＯの顕著な相違点として認められた。

以上のような、わが国のトップレベルのクラブメンバーである後天的身障者のアスリートキャリア形成をめぐる要因と問題点、ならびに⑴で述べた車椅子バスケットへの社会化をめぐる性差に関する知見から、さらに次の点が指摘されよう。

まず、障害者スポーツ振興について。男子においては、車椅子バスケット界（ないしその周辺）で後天的身障者を勧誘し、言わば車椅子バスケット仲間を増やしていこうとする動きが活発である様子を窺うことができる。前述のように、男子では車椅子バスケット界の勧誘ネットワークが一定レベルで形成されているのに対し、女子においてはそこまで至ってはいないとみられる。女子においても、そうしたネットワークを張り巡らしていけば、あるいは多くの後天的身障者が何らかの形で車椅子バスケットに出会えるような場（機会）を増やしていけば、さらなる車椅子バスケットの振興をおし進めることができるのではないかと思われる。むろんこのことは、車椅子バスケットに限らず障害者スポーツ全般に当てはまるであろう。

次に、障害者スポーツの競技力向上について。こうして車椅子バスケットの振興をおし進めていくことは、競技者人口を増やし競争力を高めるなどにより、自ずと競技力向上にもつながっていくであろう。ただし、競技力向上を図っていくにはこれに留まらず、個々のアスリートキャリア形成を促進していくことが必要となることは言うまでもない。それにあたっては、特に競技環境をめぐる問題の解決策を講じていくことが求められる。本研究では、競技活動と仕事や家庭との両立の問題、また競技活動に不可欠である練習場所や資金の確保といった物的な問題が見出された。こうした問題は、おそらく健常者と同様にプロ化しなければなかなか解決し得ないだろうが、実際にはそれは容易ではないと言える。さしずめ、ＮＯにみられたように練習場所等の障害者に不利な面がある部分に関して、個々のクラブないし個々人の問題として片付けるのではなく制度的な支援をしていくことが重要であるに違いない。

最後に、後天的身障者にとってのスポーツの意味についてであるが、さしずめ本研究の事例において車椅子バスケットは、主に楽しみや生きがい、また仲間を得るために貴重なものであったと言える。そんな中で、前述した「かけなくなっていた運動による汗をかけたことが快感だった」「社会で感じるバリアがなかった」との語りは、後天的身障者にとってのスポーツの意味を考える上で示唆に富む。つまり、後天的身障者の場合は人生の途中で身体に制限が加わったからこそ、健常者であった時と同様の身体的（快）感覚あるいは身体的自由を意識的にせよ無意識的にせよ求める面が強いのではないかと思われる。健常者にとっては自然なことが、身体障害者にとってはそうではないのだ。スポーツは身体性を核とするゆえに、そうした身体的な欲求（要求）に応え得るものであるのだろう。また、バリアについて言えば、身体障害者となって社会で感じる（好ましくない）バリアを、車椅子バスケットを行う際には感じないですむとみられる。バリアの点でも、後天的身障者は健常者であった時と同様に感じないでいたいのであり、スポーツはそれに資する貴重なものなのだと言えよう。

５．主な発表論文等

学会発表および論文作成は今後、本研究の知見のまとめ方を熟慮しつつ着々と行っていく予定である。

６．研究組織

⑴研究代表者
吉田　毅
東北工業大学・ライフデザイン学部・
准教授
研究者番号：７０２１０６９８